

「子ども食堂」

地域が支える

クローズアップ



福岡・久留米



「安武子ども食堂」で食事をとる子どもたち＝福岡県久留米市

日本の子ども6人に1人が貧困状態にある現状を見逃ごせない、子どもたちに健康的な食事を無料または低料金で提供する「子ども食堂」が全国に広がっています。昨年12月にスタートした福岡県久留米市の「安武子ども食堂」を2月に訪ねました。

(丹田智之)

「いただきます」安武校区コミュニティセンターの一室に集まった約60人の子どもたちが、笑顔で食器を手に取ります。この日のメニューは、親子丼、白菜とホウレンソウのあえ物です。デザートには、地元名産のイチゴも出されました。

参加するのは4回目という小学2年、かのかちゃん(7)は「あたたかくておいしい」と親子丼に大満足の様子です。調理を担当するのは、

老人会や福祉施設のボランティア15人です。食材の一部を近隣の農家から無償で提供してもらい、募金も集めながら、1食100円で月2回、子どもたちに振る舞っています。発起人で安武小学校PTA会長の緒方麻美さん(47)は「共働きの世帯が増え、子どもが1人で食事することも珍しくありません。それぞれの住民が子どもの貧困に関心を持つ中で、なんとかしたい」と思いで自治会や

老人会の役員と話し合いました」と語ります。元小学校教員の仲澄江さん(76)も「家庭の経済的な事情で栄養のある十分な食事がとれない子どもたちのためになれば」と運営委員会の会長を引き受けました。

久留米市の学力・生活実態調査(2015年度)では、市内の小学校に通う約7%の児童が、朝食を「あまり食べない」「まったく食べない」と答えています。仲さんが子どもたちに「朝ごはんを食べなかった子はいますか」と問い掛ける時、この日も3人が手をあげました。

子ども食堂の運営に携わる自治会長の浦川豊彦さん(61)は「子どもの貧困は、昔と違って、私たちの目に見えないところで進行しています。超高齢化とともに、地域で対処すべき喫緊の課題です」と危機感を募らせています。

住民らは定期的に会議を開き、子ども食堂の運営について話し合っています。

浦川さんは「貧困状態にある子どもたちに参加を呼びかける方法が、今後の課題になっている」と説明します。

子ども食堂の問題に詳しい「子どもNPOセンター福岡」の長阿彌幹生事務局長は「子どもたちに生きる権利を保障する手段の一つとして、子ども食堂が果たす役割は重要です。同時に、貧困をなくすには、土台にある社会構造を変える必要があります。子ども食堂を通して、貧困問題について考えてほしい」と期待を込めます。

県内では福岡市が2016年度予算で子ども食堂を運営する7団体に430万円の助成金を盛り込むなど、住民の取り組みが行政を動かしつつあります。

日本共産党の金子むつみ久留米市議は「市が実施すべき貧困対策の一環として、子ども食堂への支援を検討するよう求めていきたい」と述べています。

周知が課題に